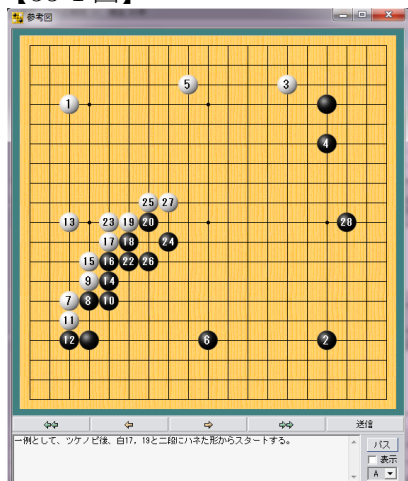


19. その後の検討：白隅の削減にまつわる研究

19-1：白隅での頓死を避けるための研究（白小目の場合）

白の初手が星の場合、三々に入って生きるのは容易であるが、初手が小目の場合、上辺の構

【55-1 図】

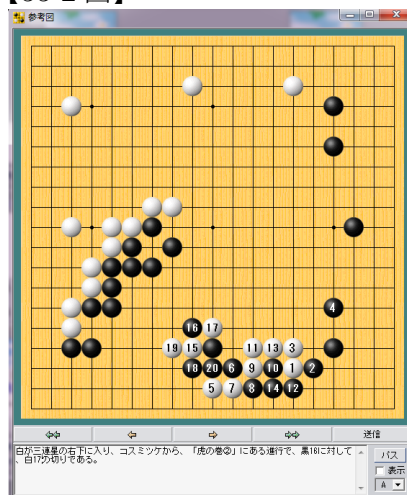


えによって、頓死することが度々あった。

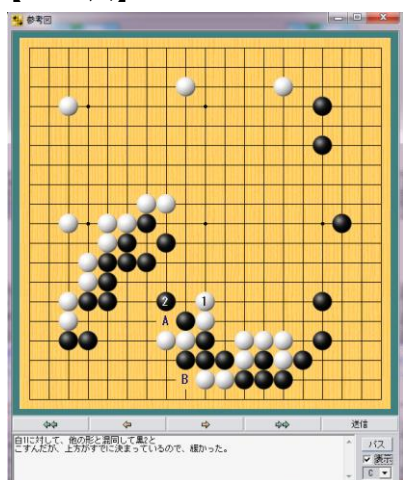
【55-1 図】一例として、白小目で開始し、ツケノビ後、白 17, 19 と二段にハネた形からスタートする。

【55-2 図】白が三連星の右下にかかり、コスミツケから、「虎の巻②」にある進行で、黒 16 に対して、白 17 の切りから、黒 20 までは、先に記載した通りである。（14 図）

【55-2 図】



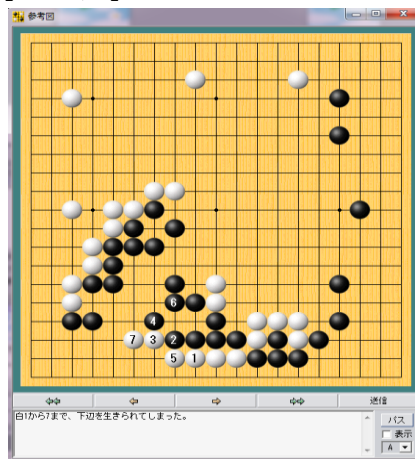
【55-3 図】



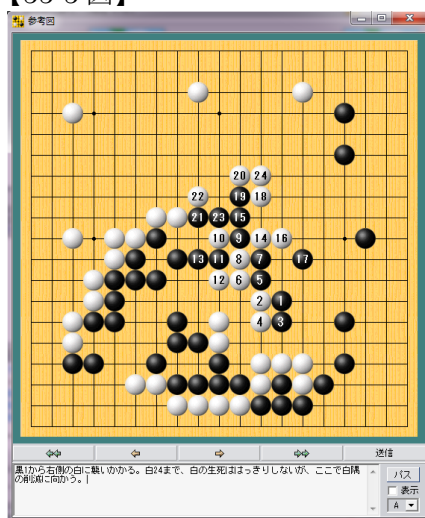
【55-3 図】白 1 に対して、他の形と混同して黒 2 とこすんだが、上方がすでに決まっているので甘かった。黒 A とし、白 B が先手とならない工夫をすべきであった。

【55-4 図】白 1 から 7 まで、下辺を生きられてしまった。

【55-4 図】



【55-5 図】

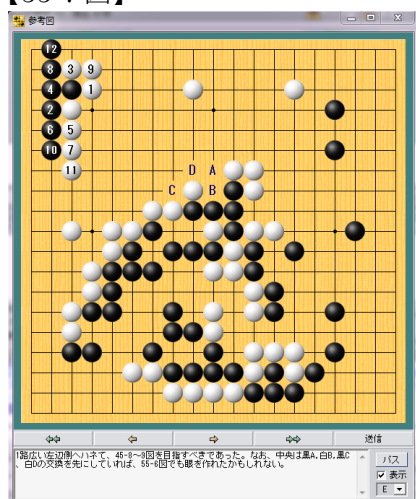


【55-5 図】黒 1 から右側の白に襲いかかる。白 24 まで、中央下側の白はほぼ死んだものとして、ここで白隅の削減に向かう。中央の白が厚くなっている点に要注意である。

【55-6 図】黒 1 の三ツツケから、常套の形で進んだが、中央に 1 眼作ることができず、頓死してしまった。早い時点で、A や B のキリで白の形を崩しておくことが必要であった。反省：白 2 に対して、黒 3 と切ったため、白に押さえる方向を選択させてしまったことが敗因であった。

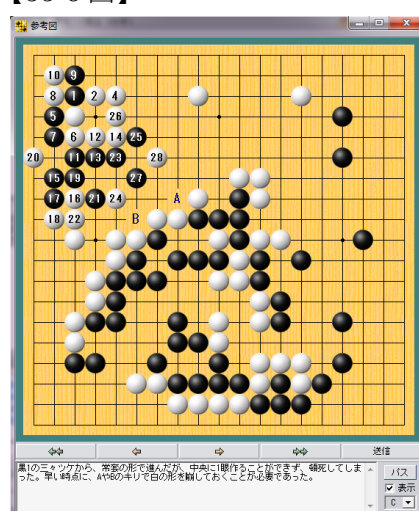
【55-7 図】1 路広い左辺側へハネて、45-8〜9 図を目指すべきであった。なお、中央は黒 A、白 B、黒 C、白 D の交換を先にしていれば、55-6 図でも中央に 1 眼を作ることができたと考えられる。

【55-7 図】

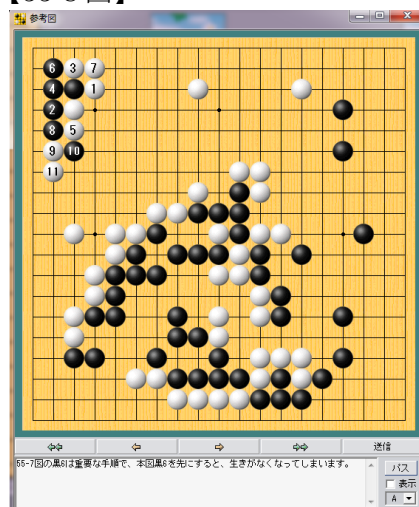


【55-8 図】55-7 図の黒 6 は重要な手順で、本図黒 6 を先にすると、白隅での生きに失敗します。

【55-6 図】

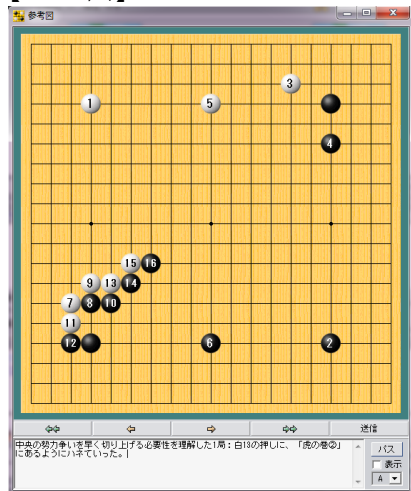


【55-8 図】



19-2：白隅を削減するタイミングの研究-1（12. 中央の勢力競争を早めに切り上げる検討の
続き）

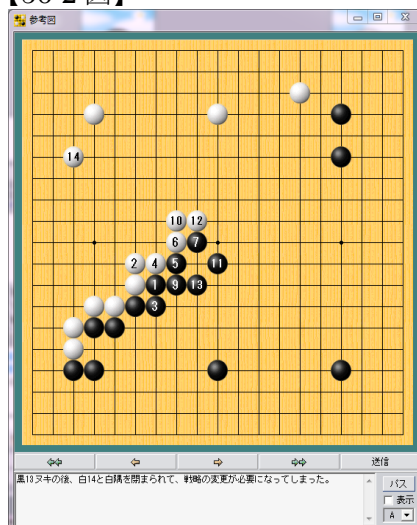
【56-1 図】



【56-1 図】中央の勢力争いを早く切り上げる必要性を理解した1局：白13の押しに、「虎の巻②」にあるようにハネていった。

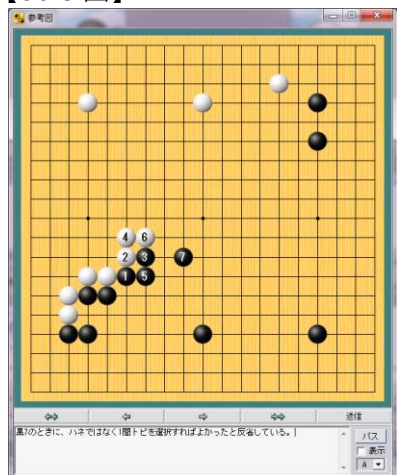
【56-2 図】黒13ヌキの後、白14と白隅にシマリを打たれ、これで劣勢になったわけではないが、戦略の変更が必要になってしまった。

【56-2 図】



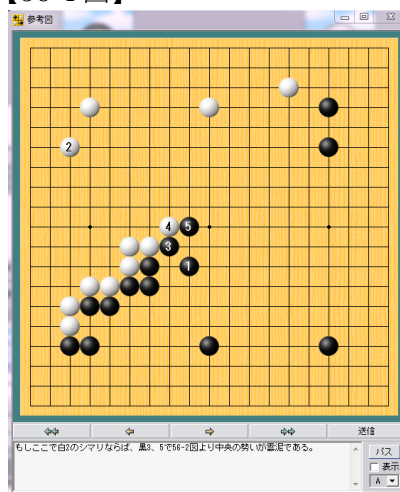
【56-3 図】黒7のときに、ハネではなく1間トビを選択すればよかったと反省している。

【56-3 図】

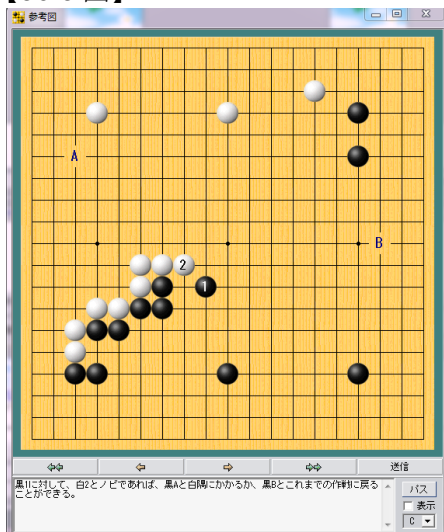


【56-4 図】もしここで白2のシマリならば、黒3、5で56-2図と比べ、中央の勢いに雲泥の違いがある。

【56-4 図】



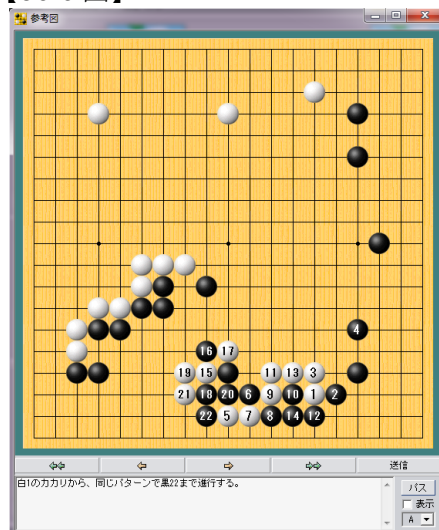
【56-5 図】



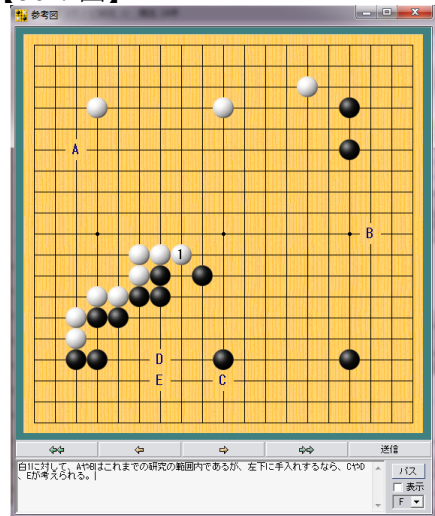
【56-6 図】 白 1 のカカリから、同じパターンで黒 22 まで進行した場合、中央を止められないようにすることが重要である。ツケノビ後の形がとても気持ち悪くなっている。56-5 図の後、左下に手入れするのが正しいかもしれない。最低限、49-2 図の黒 A、白 B の交換は必要である。ツケノビ後がどうであっても、黒 A（本図の 17 の一路上）とあてる手順が最終結論といえる。

【56-5 図】 黒 1 に対して、白 2 とノビであれば、黒 A と白隅にかかるか、黒 B とこれまでの作戦に戻ることができる。このように、三連星ツケノビに対して、56-1 図の白 13 と押して、黒 14 とハネた後（9 図白 1、黒 2）、中央の拡大競争を先手で切り上げることが重要である。相当数の負けパターンが、ここから始まっていた。黒 B とした場合、盤面の下半分は白小目からスタートした 49-1 図と同じパターンである。

【56-6 図】



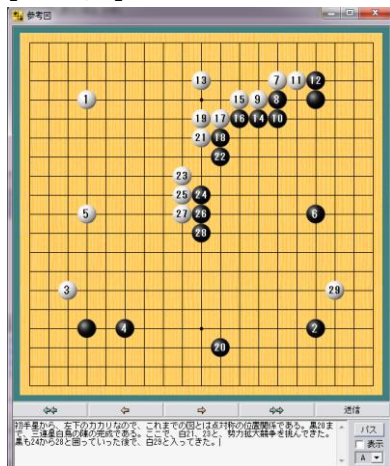
【56-7 図】



【56-7 図】 A や B はこれまでの研究の範囲内であるが、左下に手入れするなら、C や D、E が考えられる。

19-3：白隅を削減するタイミングの研究-2（別の負けパターンの反省）

【57-1 図】

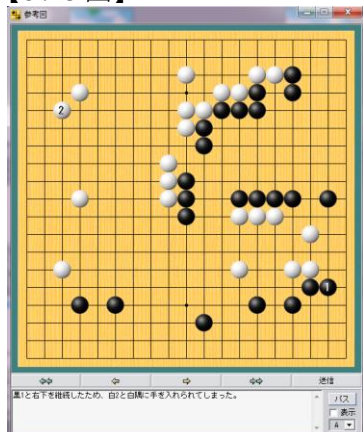


【57-1 図】初手星から、左下のカカリなので、これまでの図とは右上と左下が入れ替わる位置関係である。黒 20 まで、三連星ツケノビ黒鳥の陣の完成である。ここで、白 21、23 と、勢力拡大競争を挑んできた。黒も 24 から 28 と囲っていった後で、白 29 と入ってきた。

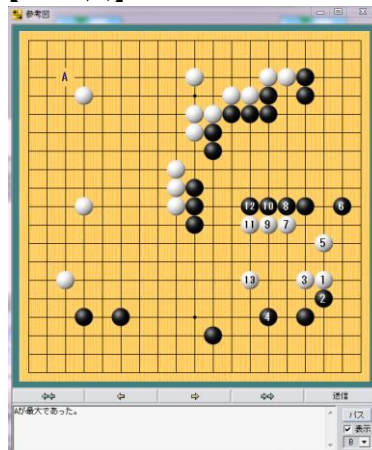
【57-2 図】白 1 のカカリに黒 2、4 これまで通り。ここで、白 5 と狭く開いて、収まりにきた。白 13 まで、ほぼ収まったところで、黒は考えるべきであった。A が最大であった。すなわち、白隅に入るタイミングが重要であった。

【57-3 図】実戦は黒 1 と右下を継続したため、白 2 と白隅に手を入れられてしまった。（以下略）

【57-3 図】

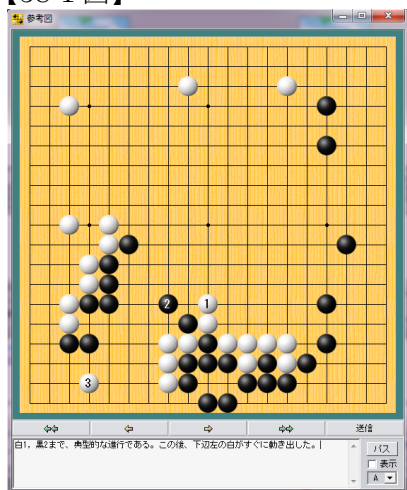


【57-2 図】



19-4：別の勝ちパターン（三連星の左右の白がつながっても大丈夫）

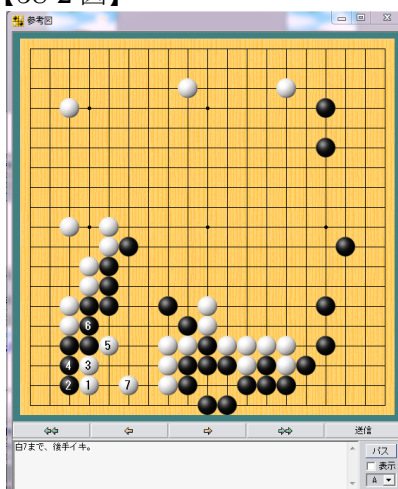
【58-1 図】



【58-1 図】 白 1, 黒 2 まで、典型的な進行である。この後、下辺左の白がすぐに動き出した。

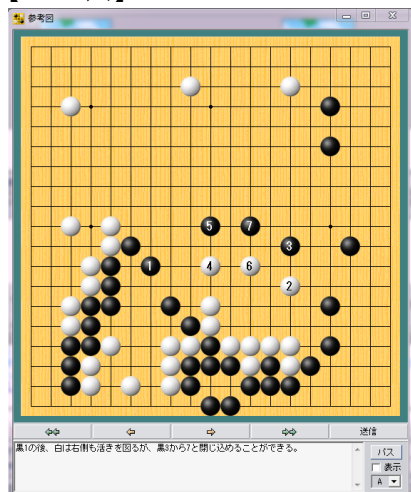
【58-2 図】 白 1 から白 7 まで、後手ながら、生きられてしまった。上側の形が決まっていないものの、前述 (36 図・37 図) のように、下辺左の白を生かささない方法も考えられる。

【58-2 図】



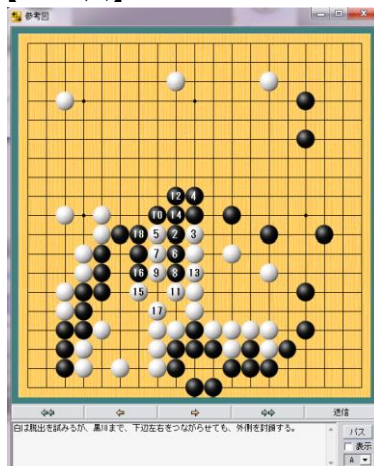
【58-3 図】 黒 1 とついで、中央に向かっていくことが重要である。白は右側も活きを図るが、黒 3 から 7 と閉じ込めることができる。

【58-3 図】

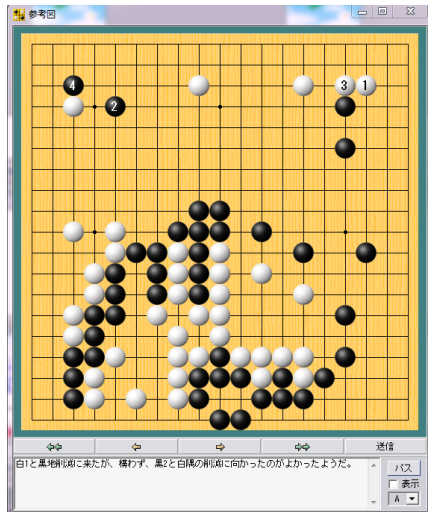


【58-4 図】 白は脱出を試みるが、黒 18 まで、下辺左右をつながらせても、外側を封鎖する。

【58-4 図】



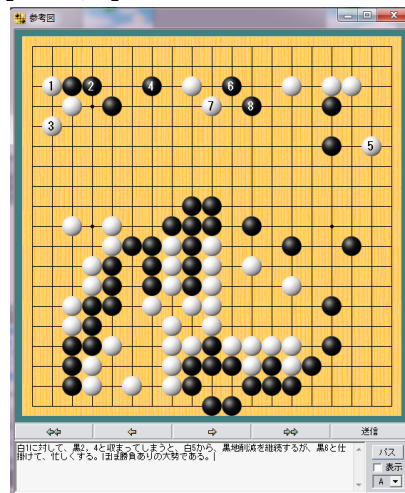
【58-5 図】



【58-5 図】白 1 と黒地削減に来たが、構わず、黒 2 と白隅の削減に向かったのがよかったようだ。

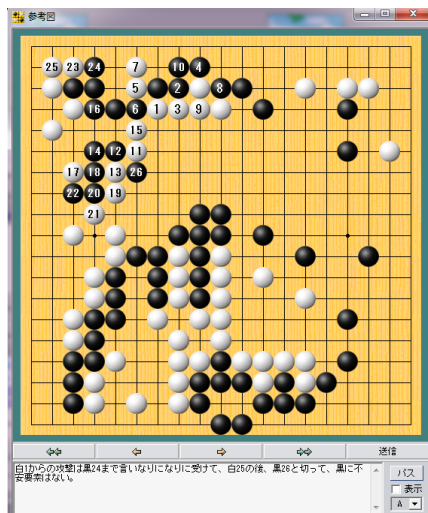
【58-6 図】白 1 に対して、黒 2, 4 と収まってしまうと、白 5 から、黒地削減を継続するが、黒 6 と仕掛けて、忙しくする。ほぼ勝負ありの大勢である。

【58-6 図】



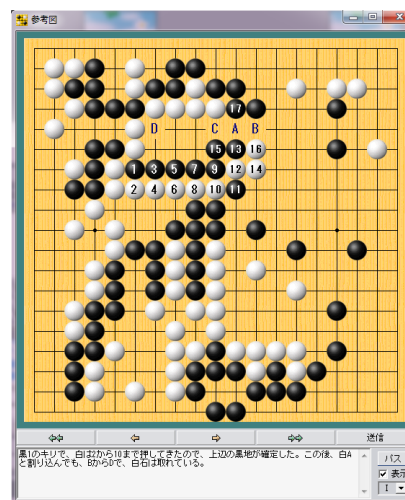
【58-7 図】白 1 からの攻撃は黒 24 ままで言いなりに受けて、白 25 の後、黒 26 と切って、黒に不安要素はない。

【58-7 図】

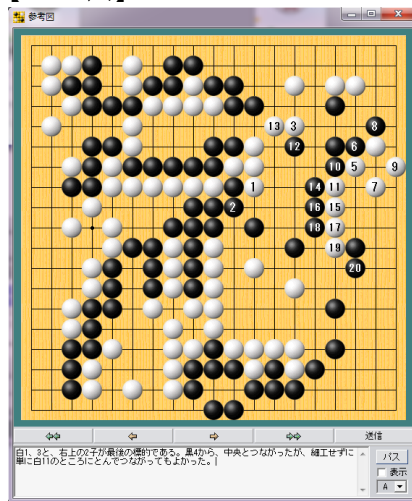


【58-8 図】黒 1 のキリに対して、白が 2 から 10 まで押してきたので、上辺の黒地が確定した。この後、白 A と割り込んでも、B から D で、白石は取れている。

【58-8 図】

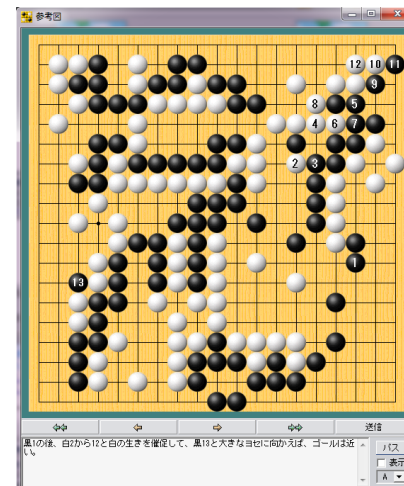


【58-9 図】



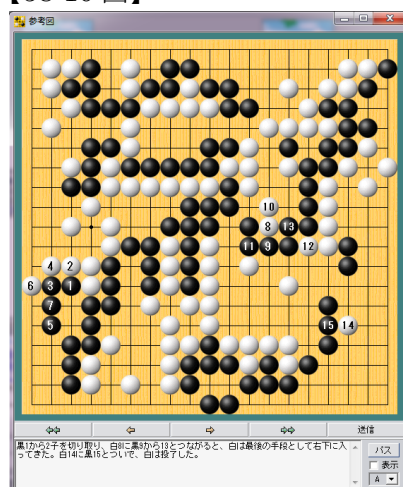
【58-9 図】 白 1、3 と、右上の 2 子が最後の標的である。黒 4 から、中央とつながったが、細工せずに単に白 11 のところにとんでつながってもよかった。

【58-10 図】



【58-10 図】 黒 1 の後、白 2 から 12 と白の生きを催促して、黒 13 と大きなヨセに向かえば、ゴールは近い。

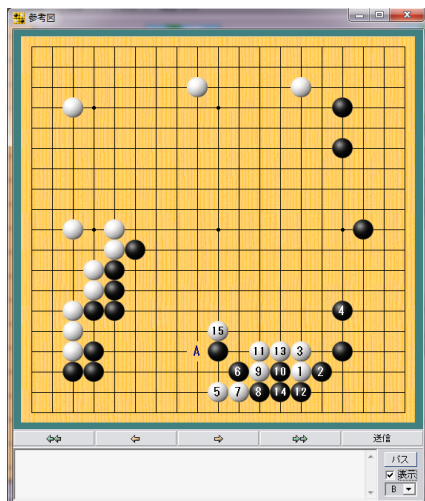
【58-10 図】



【58-11 図】 黒 1 から 2 子を切り取り、白 8 に黒 9 から 13 とつながると、白は最後の手段として右下に入ってきた。白 14 に黒 15 とついで、白は投了した。黒がつながってしまえば、白が生きたとしても勝敗には関係しない。このように、白隅の削減タイミングを逃さなければ、三連星に入ってきた左右の白石がつながっても、圧倒できるのである。

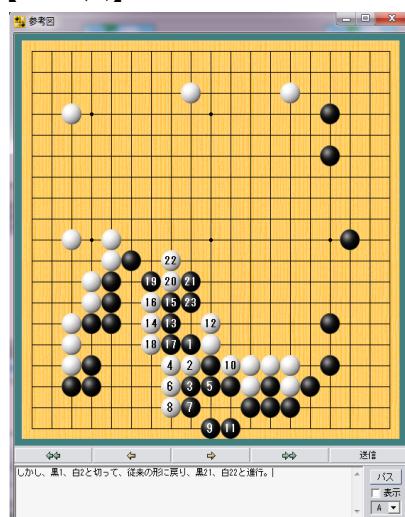
19-5：負けケースの代表例（追補）

【59-1 図】



【59-1 図】 典型的な『三連星ツケノビ黒鳥の陣』で始まった負けケースから学んだこと：左下で白が星の黒に付けた場合、「虎の巻②」にあるように、三々に押さえてカタツギするが、下辺左の白は不自由になっているので、白は下辺右側の生きを優先してくる。図のように、右下にかかって、白 5 とすべる典型的な進行で、これまで多くの場合、白 A と付けてきたが、黒 A とのびることを期待して、上に付けてきた。

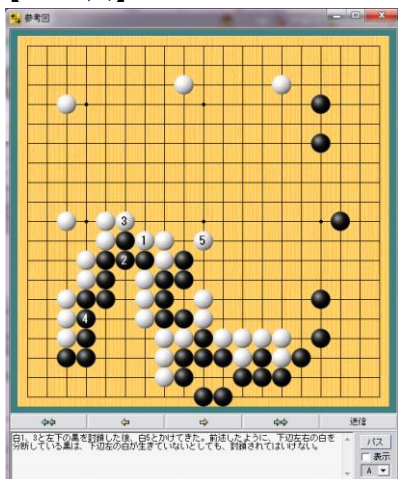
【59-2 図】



【59-2 図】 しかし、黒 1、白 2 と切って、従来の形に戻り、黒 21、白 22 と進行した。

【59-3 図】 白 1、3 と左下の黒を封鎖した後、白 5 とかけてきた。前述したように、下辺左右の白を分断している中央の黒は、下辺左の白が生きていないとしても、封鎖されてはいけぬ。

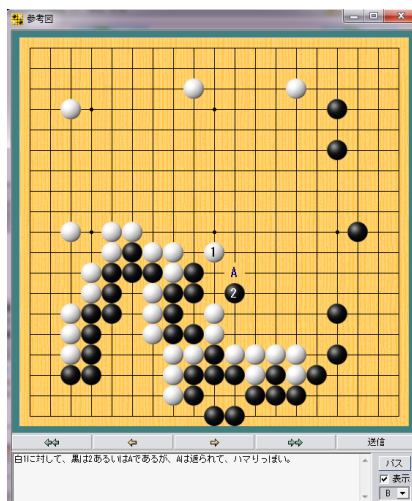
【59-3 図】



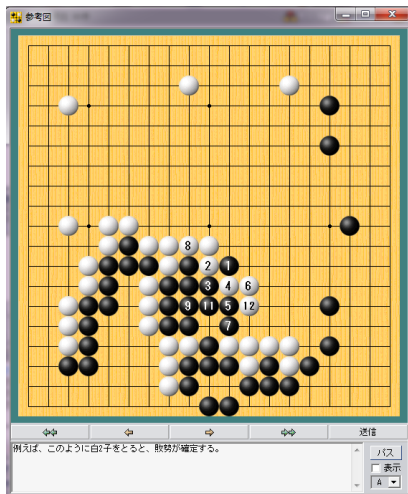
【59-4 図】

白 1 に対して、黒は 2 あるいは A であるが、A は遮られて、いかにもダメヅマリでハマりっぽい。

【59-4 図】



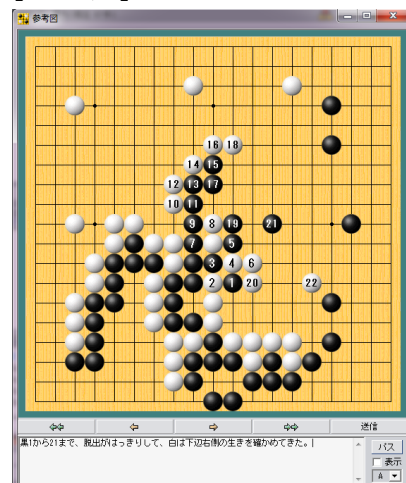
【59-5 図】



【59-5 図】例えば、このように白 2 子をとると、敗勢が確定する。そこで、59-4 図のようにトビから進行した。

【59-6 図】黒 1 から 21 まで、脱出がはっきりして、白は 22 と下辺右側の生きを確かめてきた。このように、下辺右側の白を生かし、かつ中央への黒の侵入が止まった場合、この後、白隅に打ち込むのだが、白隅での生き方が勝敗を左右する。

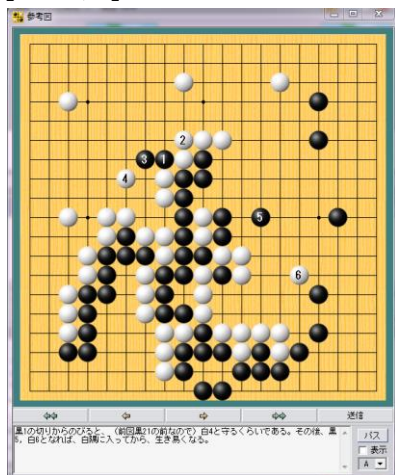
【59-6 図】



【59-7 図】反省点 1 : 【59-6 図】の黒 21 のとき、白隅に入る前提で、中央に何か仕掛けておくべきであった。例えば、黒 1 の切りからのびると、

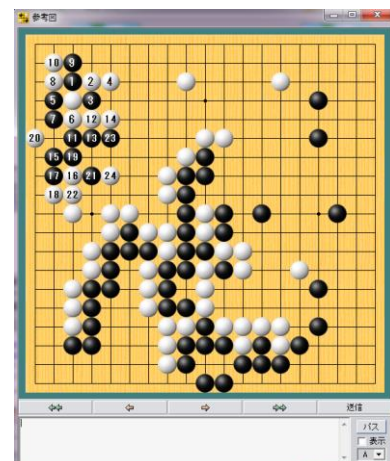
(59-6 図黒 21 の前なので) 白 4 と守るくらいである。その後、黒 5, 白 6 となれば、白隅に入ってから、生き易くなる。

【59-7 図】

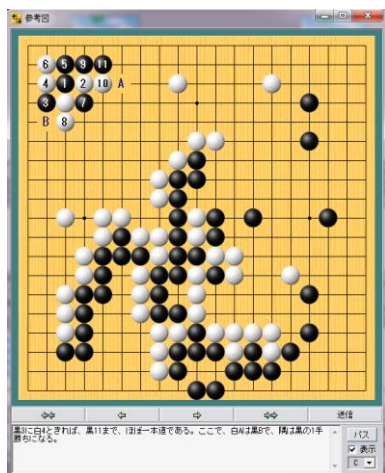


【59-8 図】反省点 2 (実戦の進行) : 黒 1、白 2 のとき、黒 3 と切り、黒 11、13 をきかせた後、黒 15 とカケツギしたため、白 24 まで、辺に 1 眼しか作れず、頓死してしまった。黒 15 で 17 とすべっても、生きは難しそうである。黒 3 で 5 とハネるか、59-7 図の黒 1、3 があれば、白隅での生きは容易と思われる。

【59-8 図】



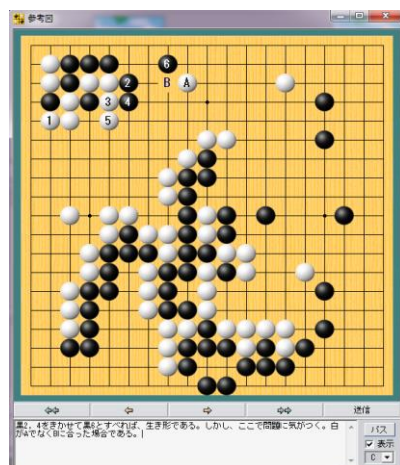
【59-9 図】



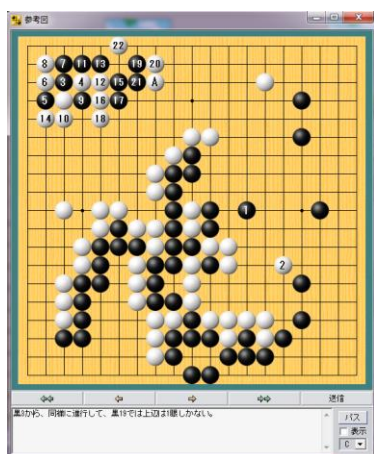
【59-9 図】 黒 3 に白 4 と切れば、黒 11 まで、ほぼ一本道である。ここで、白 A は黒 B で、隅は黒の 1 手勝ちになるので、白 B となる。

【59-10 図】 黒 2, 4 をきかせて黒 6 とすべれば、生き形である。しかし、ここで問題に気がつく。白が A でなく B の場合である。白初手小目の場合、上辺のヒラキは 3 通りある (31 図)。そのうち、小目から最も狭いのが B である。

【59-10 図】



【59-11 図】



【59-11 図】 上辺のヒラキが白 A で、黒 1、白 2 まで進行した後に、黒 3 と白隅に入った場合、59-10 図の黒 6 とはいけな。黒 3 から、同様に進行して、黒 19 では上辺は 1 眼しかない。中央に 1 眼作らなければならないが、このときに 59-7 図の黒 1、3 があれば、助けになるかもしれない。(未検討)

【59-12 図】 上辺が白 A と狭い場合、黒 3 と広い側へハネて、黒 7 の切りから黒 9、11 とはって 13 とつければ、中央に B と C の切味もあって、上辺で生きられそうである。その意味では、59-7 図のように中央の形を決めないほうがいいのかもしれない。

【59-12 図】

